

教育心理学と中村古峡

法政大学社会学部兼任講師 安齊 順子

これまで筆者は、明治大正時代の教育心理学や、心理学のルーツについて探求してきた。今回は、この時期に催眠術に関連した人物として、中村古峡を取り上げる。正規の心理学教育を受けたとは言えないが、中村は「心理治療者」として非行少年の治療を行っていた時期がある。この時期の教育と催眠について理解するため、中村を中心として以下詳述する。

筆者は、2019年の「西周と教育心理学の関係性」という論文で、「松本時代を実験心理学の時代とすれば、オランダ留学後に西が翻訳した『心理学』とドイツ留学後の松本の「実験心理学」との間の時期にどのような「教育心理学」が存在し、どのように受容されていったのか、は今後の研究課題となる」（安齊、2019）と述べているが、中村の活躍時代はこの間の時代である。

1. 中村古峡と雑誌『変態心理』概要

中村古峡（なかむら・こきょう、本名・霧、読み・しげる）は東京帝国大学出身の文学者で、夏目漱石の弟子で朝日新聞に小説「殻」を連載した小説家であったが、弟の精神病の発病・病死をきっかけに現在で言う「異常心理」に興味を持ち、「日本精神医学会」を大正期につくり、雑誌『変態心理』を発行しつづけた（1）。この『変態心理』は森田正馬が独自の森田療法を創始しはじめた時期に、論文を発表した雑誌として最近再評価がなされている。なお変態はabnormalの訳であり、現在で言う「異常心理学」にあたる。

日本精神医学会を設立した時、中村古峡の有力な協力者は森田正馬であった。雑誌『変態心理』には根岸病院（当時、森田が勤務していた病院）の広告が載せられ、森田は頻繁に『変態心理』に寄稿していた。『変態心理』には中村と森田の対談も載せられている。

中村古峡は最終的には東京医学専門学校に入学し、精神科医に転身した。文学の領域では瀬沼茂樹の「日本文壇史」に「漱石門下の文人たち」として登場している。中村古峡と夏目漱石の交流の様子は漱石の書簡集に残されている。また夫人・夏目鏡子著「漱石の思い出」では五女雛子が突然の病気になった日、夏目漱石のもとを中村古峡が訪ねていたことが記されている。

中村古峡は当時の文学と精神医学領域の間に挟まる人物であった。フロイトの本を久保良英（2）と一緒に翻訳している。ユングの翻訳も行っており、ユング全集（ドイツ語版）には日本語に訳されたユングの著作一覧があるが、その初期のものは古峡が翻訳を計画、実行したのであった。1926年、『ユング論文集』（近世変態心理学大観第10巻）が中村古峡・小熊虎之助訳として刊行された。1931年「生命力の発展」ユング著、中村古峡訳が刊行された。この書は今日『変容の象徴』と訳されているユング初期の大作であった（安齊、2001）。小熊虎之助は1917年「心理研究」に「精神病学に於ける人本主義運動」としてユングの論文（のちに『分裂病の心理』に収録されるもの）を翻訳紹介している。小熊は中村古峡の協力者で、しばしば「変態心理」にも寄稿していた。

現在、中村古峡の療養所は中村古峡記念病院として遺族が精神科の診療を続けている。雑誌「変態心理」が復刻されたこと、また中村古峡が「日本初の多重人格事例発表者」として一部から注目を受けたことなどにより、これまで認められなかった業績が掘り出されつつある（3）（竹内他、2016）。

中村古峡のつくった「日本精神医学会」であるが、当時、現在で言う精神医学の学会には「日本精神神経学会」があり、東大精神科の教授たちを中心に研究が進められていた。その研究内容はどちらかというと脳神経学に傾斜しており、中村らはそれとは別に現在で言うノイローゼ、非行、犯罪、流言飛語などの臨床心理学・社会心理学・社会病理に相当する内容を毎回扱い、海外の知見を含め発表していた。真摯な研究雑誌であったが、「変態心理」というタイトルに対しての偏見、世間の誤解が重なり、戦争で雑誌がなくなる等の不運もあってか、これまで埋もれた存在であった。雑誌内容については、当時の「神経学雑誌」と「心理研究」（日本心理学会発行）との間をつなぐものであったと考えられる。

中村はフロイト研究も行っていた。フロイトの著書の翻訳や精神分析概論をたびたび「変態心理」に掲載した。翻訳の協力者は久保良英であった。久保はアメリカに留学後、日本ではじめての「精神分析学」という本を執筆した人物であった。東大・福来友吉の千里眼実験の助手も勤めた。その後心理療法ではなく知能

検査の研究を行っていた。

中村古峡はこのあと紹介する事例では積極的に催眠の技法を用いている。日本では日本心理学の父・元良勇次郎の元で学位をとった福来友吉が東大在職中に催眠の研究をし、「催眠心理学」などを執筆していたが、諸般の事情で東大を離れ、他私立大学で研究を続けたため、アカデミズムでは実験心理学が重視され、催眠はしばらく研究がなされない状態が続いていた。このブランクの時代に中村古峡は個人的事情から催眠などの治療法を外国文献からとり入れ、検討・実施していたと考えられる。なお、精神医学については森田正馬との親交や助言、論文投稿もあり、かなりの知識をもった上で治療上の問題を感じ、医師の免許取得を志したと考えられる。

なお文学者としての中村古峡については曾根(1999)が詳細な研究を行っている。中村古峡にとって弟の精神病の発病から死までを小説『殻』という形で書き記したことはその後の精神医学研究者としての人生を決定した事件だったと言える。当時の書評には「人間が精神を病むとはまさにこのような様か、と思わされる」と絶賛されていたが、漱石との不仲、興味の移動があり、文学者としてではなく精神医学・心理学研究者としてのその後を歩むことになった。

なお雑誌「変態心理」は復刻版が出ており、現在では比較的簡単に論文を見ることができるようになっている。雑誌「変態心理」には森田正馬も催眠に関する論文を寄せている。先行研究はあまりなく、中村は海外の文献を読み試行錯誤で治療を実施していた。

2. 催眠治療にいたる経緯

中村古峡にとって最初に公開された事例は「不良少年と二重人格」として『心理研究』(第65号、第11巻第5冊)に掲載された記録にあるように、少年を対象とした催眠療法であった。中村は催眠の技術は村上辰午郎から学んだというが、はっきりした時期は不明である(曾根, 1999)。「二重人格の少年」によれば中村はある中学から盗癖のある子供の矯正を依頼されたという。ある中学とは以前中村が勤務していたところであり、曾根(1999)によれば中村は1910(明治43)年より高輪中学の英語教師をしていた。ここから、『変態心理』創刊の1917年までの間に、中村は新聞小説『殻』を連載しており、小説で身を立てることを目指していた(小説の連載時期は1912・明治45年)。その後、1916(大正5)年に中村が師と仰いでいた夏目漱石が没したあと、「変態心理」研究の道を志したと曾根は述べている。『変態心理』の創刊(1917)後、二重人格の少年の続編が載せられていることから、二重人格

の少年の治療は、『変態心理』創刊の少し前から行われていたと考えられる。推測であるが小説『殻』のあと見るべき小説が生まれない状態で、悩んでいたとされる時期に中村は催眠療法家への道を歩んでいたようである。「二重人格の少年」がまず『心理研究』に掲載されたことから、掲載前には『心理研究』の編集関係者と知り合ったと推察される。

催眠に関する著書を書いていた精神科医では石田昇がいたが、彼はアメリカに留学中事件に巻き込まれ(4)その後精神科医として復帰することはなかった。森田正馬も催眠についてはいくつかの論文を残している。

催眠術の明治時代の最大の流行は1903(明治36)年頃であったと考えられるが、その後催眠術は1908(明治41)年より処罰の対象となる。明治の末から下火になりかけていったが、大正時代にもなくなったわけではなく、このような時期に中村は単行本となる『二重人格の女』の研究を行った。雑誌『心理研究』は東京大学の心理学専攻生が卒業後に元良の許可のもと、発行していた雑誌であり、これまで述べてきたように教育心理学の学会や雑誌は第二次大戦後に生まれたことから、『心理研究』は教育心理学のルーツの雑誌の一つと考えることができる。『心理研究』には当時東京大学を卒業した心理学者の論文が載せられていたが、中村は文学出身であるものの、論文内容が心理学に関連するとみなされたようである。

中村にとって重要な心理学の知り合いは久保良英であり、久保は東京大学卒業後、都内の児童相談所に勤務した人物である。留学後、精神分析の著作を発行した。また、中村と一緒に翻訳を行った。最後は広島大学教授となっている。久保はアメリカのホール(Granville Stanley Hall)のところに留学したが、ホールは初代アメリカ心理学会会長であり、「青年期」の研究者として著名であり、教育心理学の領域の始祖と言える。アメリカ帰国後の久保にとって、フロイトや精神分析について理解してくれる心強い仲間が中村であった、と考えられる。ホールは1878年にウィリアム・ジェームズのもとで心理学の博士号を取得し、ライプツヒヒ大学に留学シメントに直接指導を受けた。

3. 中村の心理学史的検討

中村自身がテーマとしていた治療法は、催眠、フロイトの精神分析、変形森田療法、仏教の講和、作業療法と変化した。博士号を取得したのは「作業療法」に関する論文である。雑誌『変態心理』はモートン・プリンスの Journal of Abnormal Psychology(当時刊行されたアメリカの異常心理学の雑誌)を参考にし

た可能性がある。ジャストロー（当時のアメリカの異常心理学者）の論文を翻訳紹介していることから、アメリカの文献を入手して読んでいたと推察される。（ジャストローと文通記録あり：中村古峽記念病院に現在も保存されている）

今回中村記念病院での調査で見つかった資料群の中から、ジャストローからの手紙が見つかっている。内容は、「無意識」（1906）の本の翻訳権利を中村先生にあげます、というものであった（資料番号 B1-L38）。中村は当時の異常心理学の著作の翻訳をいくつか行っているが、関東大震災が起こったために計画通りに訳書を刊行することができなかった。

今回発見された資料は中村が行った翻訳に際して、著者本人と文通によって実際に交流し、翻訳許可を得たことを示している。中村の文通相手のジャストロー（Joseph Jastrow (1833—1944) は、ポーランド生まれ。ペンシルバニア大学卒。ジョンズホプキンス大学で博士号を取得（1886）。ウイスコンシン大学で心理学教室を作り、1927年まで教授であった。1900年アメリカ心理学会、会長となった。1869年、国際心理学会で W. ジェームスと知り合う。1890年代、催眠の研究を行った。催眠、自動書記の研究で有名である。弟子はクラーク・ハルである（以上の内容は Stewart, W.A. Biographical Dictionary of psychologists, psychiatrists and psychotherapists による）。

中村は当時、アメリカ心理学会会長であり、催眠の研究者でもあったジャストローと交流し、その本の翻訳許可を得ていた。これらのことから中村は心理学者として、海外の心理学者と交流し、また留学経験のある久保と翻訳を行い、心理学の知識の吸収や普及に努めていた、と言えるだろう。

さらに1920年刊行の「無意識の心理学」（ユングの心理学の本）の翻訳を許可します、という手紙が Beatrice Moses Hinkle から来ている（資料番号 B1-L38）。中村から日本語の「変態心理」を送ったようだが、日本語が読めなくて残念だ。とある。Beatrice Moses Hinkle は、ユング派分析家、サンフランシスコ生まれ。1911年にニューヨークにできた精神分析学の学校に所属。1909年、フロイトのもとで学ぶためにウィーンにいった。その後、フロイトの理論に納得できず、ユングに学んだ。1915年、アメリカに帰り、ユングの理論を広めた。1916年、アメリカではじめてカール・ユングの理論を翻訳し、”The Psychology of Unconscious”として発表した。ワシントンやコネチカットで、精神分析を行った。（以上の内容は Stewart, W.A. Biographical Dictionary of psychologists, psychiatrists and

psychotherapists による）。経歴によれば彼女は非常に初期のフロイトとユングの弟子であり、ワシントン等で働いていた精神分析家であり、中村はアメリカの精神分析家と文通し、さらに翻訳許可を得ていたことが新たに判明した。

まとめと考察

序に記したように、西周の時代から東大の松本教授までの間の教育心理学には謎が多い。その時代の中で、アメリカ留学から帰国した久保の強い味方が中村古峽であった。彼は非行少年の治療を催眠を用いて行った。当時は現在のような行動療法や認知行動療法はもちろん存在せず、治療法は海外文献から得るほかなかった。催眠に関しては村上辰午郎から学んだとされるが、中村はその後自分でアメリカの文献等を取り寄せて学び、独学を深めていったと考えられる。フロイトについては久保との関係もあり、知識を得ており、またユングについても翻訳を計画していた。本文中で述べたが、中村は結局は医師になり、作業療法を行い、それを研究テーマとした。当時は精神科の有効な治療薬がなく、精神病に類する内容の治療を行うためには医師になって病院を経営することが最善の選択だったと考えられる。その医師になるまでの途中で、品川で開業し「心理治療者」の時期が存在した。この時期、フロイトやユングの翻訳や紹介、催眠治療者時代は中村を心理学者と考えることができる。

この時期の彼の活動を教育心理学的活動とみなすことはできるだろう。中村と交流していた久保も都内で「児童相談所」で働いていた。悪癖、夜尿等の周囲が困るような子供の矯正方法の一種として、フロイトやユングの理論がその時期紹介された。その活動の中に中村も存在していたと考えられる。

久保の勤務していた児童相談所は現在ある、各県に存在する公的な児童相談所ではない。また、時代背景として心理学者は少なく、現在のようにスクールカウンセラーなどの仕事をするものもいなかった。その時期に精神病院ではなく、心理相談を行っていた意義は大きい。教育心理学は子供の発達を心理学的知識を利用して行うものだが、当時は「心理学的知識」「研究」「実践」のいずれもが足りなかった。東大の心理学専攻を卒業した者たちもすべてが大学の先生になったわけではなく、また精神科医も足りなかった（森田の卒業時、精神科を希望したのは森田ただ一人だった）。この時期に独学や海外からの知識の輸入、また相談実務についていた中村の存在は大きいものであり、評価すべきである。

序に記した時期の日本の教育心理学については不明

な点が多いため、今後の調査がさらに必要であるが、雑誌『変態心理』の編集主幹であった中村について今回は調査し、結果を述べることができた。教育心理学の歴史については今後も調査を深めていきたいと考えている。

註（１）雑誌「変態心理」や中村古峡の人となりについては日本大学・曾根博義教授の研究を大幅に参考にした。

（２）久保良英 日本初のまとまった「精神分析学」（1917）を著した人物で、東京大学文学部哲学科（心理学専攻）出身、元良勇次郎の弟子。クラーク大学、ホールの元に留学し、帰国後東大助手をしていたときにこの著を書いた。後に日本の集団式知能検査の翻訳・開発者となる。

（３）筆者は、竹内瑞穂教授の協力のもと、中村記念病院の資料の探索調査に加わり、現地での中村の日記等の確認作業を行った。（科研費課題番号19H01234、中村古峡資料群と近代の〈異常心理〉に関する総合的研究）

（４）石田昇は留学中に精神病に罹患し事件を起こし、精神病院に入院した（安齊、2000）。

謝辞 今回の資料の探索と利用にあたり、中村古峡記念病院の皆様、理事長様、竹内瑞穂教授には大変お世話になりました。記載して謝意を表します。

文献（提示順）

安齊順子 2019 西周と教育心理学の関係性 法政大学教職課程年報 VOL.18, p22—27.

安齊順子 2001 日本の「変態心理」と小熊虎之助——ユング著作の翻訳と開業心理療法活動の紹介 心理学史・心理学論／「心理学史・心理学論」刊行会編 Vol.3 p29—36.

竹内瑞穂他著（メタモ研究会編）2016 変態二十面相——もうひとつの近代日本精神史 六花出版

曾根博義 1999 中村古峡と『殻』 研究紀要・日本大学文理学部人文科学研究所編（通号 57），p51—69.